

## マタイによる福音書18章 「教会における人間関係」

### 1A へりくだりと受け入れ 1-14

1B 小さき者への悔い改め 1-5

2B 躓かせることへの警戒 6-10

3B 迷った羊への情熱 11-14

### 2A 兄弟の罪への取り組み 15-20

1B 教会戒規 15-17

2B 教会の権威 18-20

### 3A 赦しの命令 21-35

1B 数えられない赦し 21-22

2B 赦さない愚かさ 23-35

1C 莫大な負債 23-27

2C 神の赦しに基づく赦し 28-35

## 本文

マタイによる福音書 18 章から見てきます。私たちは、イエス様と弟子たちがガリラヤ地方に戻って来たところを見ました。そこからイエス様は十字架への道を歩まれますが、その間、18 章から 20 章までに、さらなる弟子たちに対する指導的な教えを与えられます。将来、彼らが神の集会、教会を任されて、その時にいろいろ具体的な事柄に対してどのように指導していけばよいのかを教えていけます。なので、教えがとても具体的です。例えば 19 章においては、結婚と離婚についての教えがあります。18 章においては、主は、私たちの集まり、教会の中にある人間関係について教えて行かれます。

背景は、17 章の最後にあります。イエス様の一行がガリラヤのカペナウムにあるペテロの家に戻ってきました。そこで神殿税の徴収に誰かが来ました。その時にペテロに対してイエス様が、「地上の王たちは、自分の子供からは徴税をしない」と言われ、「だから納税の義務はない」と言われたのです。つまり、弟子たちが天の御国において、王キリストに連なる子になるということです。主と共に御国を治め、その相続の割り当てを受けるということです。

### 1A へりくだりと受け入れ 1-14

そこでこんな質問を弟子たちが始めるのです。

### 1B 小さき者への悔い改め 1-5

1 そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。「天の御国では、いったいだれが一番偉い

のですか。」

つまり弟子たちの間で、だれが一番偉いのか？という質問をしています。なぜ、そんな質問が出てきたのか？彼らは、ピリポ・カイサリアにて大きな約束が与えられました。ご自身の集会、教会を建てて、天の御国の鍵がペテロや彼らに渡されます。自分たちが地上で解くものは天でも解かれ、地上で縛るものは天でも縛られます。とてつもない権威です。その時に、一種の特権意識が芽生えたのでしょう。そして、そのうちの三人、ペテロとヨハネとヤコブが高い山に連れて行かれました。なぜ、他の七人が選ばれないで三人は選ばれたのか？という妬みも生まれたと思います。そして今、ペテロとイエス様の二人だけの神殿税を払いました。それで、ペテロが最も偉いのか？あるいは、自分たちがイエス様の御座の右に、左に着くべきではないか？という思いが出てきました。

これからイエス様に取り扱われる問題は、長いことイエス様と共に歩んでいた弟子たちだからこそ出てきた問題です。信仰生活、教会生活を共に歩んでいる中、キリスト教会全体として捉えてもよいでしょう、要は仲間意識が多少なりともある中で起こって来る問題で、仲間における競争、またプライドの問題です。自分たちがこれだけ仕えてきたのだから、それにふさわしい処遇、待遇を受けるに値すると思います。これは、いつの間にかじわじわと出て来るものなので分かりにくいです。それでイエス様は、「悔い改めて」という言葉を敢えて使い、次のように教えられます。

2 イエスは一人の子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、3 こう言われた。「まことに、あなたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。4 ですから、だれでもこの子どものように自分を低くする人が、天の御国で一番偉いのです。

イエス様は、そこに集まっている人々の一人に、子供を連れてきている人がいたのでしょう、その子を選び寄せました。そして真ん中に立たせます。そして、「向きを変えて子どもたちのようにならなければ」とありますが、新改訳の第二版も第三版も、「悔い改めて」という言葉を使っています。明確に、はっきりと、思いを変えないといけないということです。表面的に、謙遜にならなければいけないというものではなく、根底から、心の奥底から子供のようにないといけないということです。天の御国は、子供のようなへりくだりがなければ入ることができないということです。

イエス様が、ここで言われている子供というのは、ガキじゃないんだからというような、未熟さのことを意味しません。英語ですと、childish という言葉がありますが、それではありません。Childlike という言葉がありますが、大人のように自分のしたいことをすることはできず、社会は大人中心に動いており、親や他の大人の言うことに聞き従うだけです。反抗したところで、無力です。今でこそ、子供王国なんていう言葉が出てきて、子供の言いなりみたいな風潮がありますが、当時は、子供は無条件に親や目上の者たちに従うものです。したがって、聖書では、「子」という言葉が出てきたら、「従順にしたがう者」という意味があります。光の子といたら、光の中に歩む者、

光である神に従う者という意味だし、サラの子と言え、サラの例にならい、夫に従う妻という意味になります。

へりくだり、という言葉は、いつもいつも、どういう意味なのかを確かめないといけません。ある人はこう言いました。「主にある自分を、高めることもなく、低めることもなく、有体に見ること」であります。二つの極端があります。一つは、悪い意味での謙遜です。モーセが、主に召されたのに、「私は口下手です。他の人を遣わしてください。」とって反発しました。神の恵みによって、選ばれて、用いられる時に、それに自身を持つことは自慢ではなく、主をほめたたえることです。もう一つの極端は、思い上がりです。「ロマ 12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。」主の恵みによって、信仰の量りに応じて、慎み深く考えます。

へりくだっている人ということであれば、私はビリー・グラハムのことを思います。彼は、片田舎で育ち、信仰を持ち、普通に伝道していました。このように信仰の先輩から言われたそうです、「毎日、15分、主から聞きなさい。そして15分、主に語りなさい、そして15分、聞いたことを他の人に語りなさい。」そうです、聖書を読み、祈り、そして人々に福音を語るということです。これを、生涯に渡って、彼はやり通したのです。そうしたら、キリスト教が始まって以来、最も多くの人に福音を届けた伝道者となりました。彼は、米国の大統領の牧師とも呼ばれ、何人もの歴代大統領の霊的な顧問ともなりました。けれども、彼の優れているところは、どんな人に対して普通に、まるで教会に通っている一人の名の知れない兄弟であるかのように、接したことです。だれもが彼に近づきやすい人でした。どんなに著名になっても、昔と今も何ら変わらない一貫した人だったということです。

そして、彼の情熱は、主の福音を伝えること、御言葉を説き明かすこと、説教することでした。そのためには、自分が周りから高められようが、低められようが、全く関係ありませんでした。へりくだりのもう一つの特徴は、「キリストのゆえに、我を忘れる」ということです。自分はできないとして自分を卑しめることは、高ぶっています。本当のへりくだりは、自分はできないという思いさえでこないほど、自分を塵芥だとみなし、主のこと、また主にあって他の人たちのことを考えることです。

5 また、だれでもこのような子どもの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。

イエス様は、小さき者のように低くなるというところから、すぐに小さき者たちを主のゆえに受け入れるというほうに、話を移しておられます。今、言いましたように、へりくだりと自分を忘れ、主にあって他者を考えることは一対になっています。主の名のゆえに受け入れることは、まず初めに、自分が子供のように身を低めているかどうかにかかっています。思えば、二年前でしょうか、5月の

日本カンファレンスのことですが、最後の周りの人たちとグループで祈る時がありました。私のそばには、いつもの牧師が二人いたので祈りました。とても良かったです。

そしてその一人がぼろっといいました。「ここに、元、運転免許を剥奪されたような過去を持つ人と、抑鬱になって悩んだ人がいて、そして私がいる。神の恵みによって救われた、ということだけで交わっているんですね。」そうです、牧師なんていう立場になっても、本質には、神の恵みによって、ただ信じただけによって救われた罪人たちが集まっているのです。そこにある喜び、イエス様への愛、他に何か余計なものを付けずに交わっている時に、そこに互いへの受け入れがあります。アメリカ人と日本人、そして同じアメリカ人同士であっても、個性があって、まるで違う。日本人も同じ。こんなに違うのに、どうして互いに受け入れることができるのでしょうか？それは、神の恵みによって救われた人間なのだという、救いの感動があるからです。

ここで、イエス様は、真ん中に立たせている子供だけではなく、信仰による小さき者という意味も含まれます。イエス様を信じようとしている人、また既に信じているけれども、これから成長していく人々、そういったいろいろな意味を含めて「このような子どもの一人」とイエス様は言われています。

## 2B 躓かせることへの警戒 6-10

6 わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首にかけられて、海の深みに沈められるほうがよいのです。7 つまずきを与えるこの世はわざわいです。つまずきが起こるのは避けられませんが、つまずきをもたらす者はわざわいです。

躓かせるというのは、その人が信仰を持つのを妨げることもありますし、罪を犯させることもあります。イエス様は、「つまずきが起こるのは避けられませんが」と言われていますが、イエス様ご自身、人々の躓きの石となられました。「見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。この方に信頼する者は失望させられることはない。(ローマ 9:33)」イエス様ご自身を受け入れ難いとし、信じない、信じられないで躓くことがあります。ですから、躓きは避けられません。イエス様ことで、神の御言葉や、正しさや聖さのことについて、それで信じなくなる、心が神から離れる、世の汚れに入っていくということであれば、仕方がないことです。けれども、それ以外のことで、自分が何かをすることによって小さき者をだめにしてしまう行為、信じないようにしてしまう行為があるならば、そういった者たちは災いであると言われます。

その災いを、終わりの日における滅びで言い表していますが、当時、ギリシャ・ローマ社会では水責めがありました。溺死させる罰です。そして石臼ですが、当時は料理を作る時などに使う小さいものが大半でした。けれども、ろばが引くような大きな石臼があります。今でも、ガリラヤ湖畔にいくつか、当時の石臼が展示されています。直径 1.5 メートルあるでしょうか、それだけ大きいものを首にかけられて、ガリラヤ湖の深みに沈められるほうがましと言われています。午前礼拝で言いまし

たが、あのペテロでさえ、終わりの日に父なる神の前でわたしは認めない、というほどの罪を犯したにもかかわらず、悔い改めて赦されました。ですから、これだけ恐ろしい裁きを受けるはずなのですが、悔い改めれば、その罪は赦されます。

8 あなたの手か足があなたをつまずかせるなら、それを切って捨てなさい。片手片足でいのちに入るほうが、両手両足そろったままで永遠の火に投げ込まれるよりよいのです。9 また、もしあなたの目があなたをつまずかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。片目でいのちに入るほうが、両目そろったままゲヘナの火に投げ込まれるよりよいのです。

自分が躓かせるものを取り除くことによって、人々に罪を犯させないようにします。自分が邪魔となって、イエス様のところに行くのを妨げることがないようにするのです。多くの人が、躓かせるものを置かないという時に、他者のことを考えます。あの人があんなことをやっているけれども、それを取り除かないといけないのでは？となるのですが、イエス様は、「あなたこそが、躓かせる者なのです。鏡で自分を見なさい。」と基本的に言われています。

ここで言われているのは、教会において霊的復興、リバイバルが起こっている状況です。自分自身が神の前にどうなのか？神と自分、また神と他の人たちの間に、自分が妨げの石を置いているのではないか？という問いかけです。そのためには、体の一部を切り取ってでもいいから、取り除きなさいということです。これは、もちろん実際に体の一部を切り取ることではないのですが、実に不快な考えです。けれども、それこそがイエス様の意図です。非常に不快なことであっても、天の御国に入るためのためならそうしなさいと言われていています。それだけ、天の御国に入るということがイエス様にとって最優先であり、最も価値のあることだということです。

10 あなたがたは、この小さい者たちの一人を軽んじたりしないように気をつけなさい。あなたがたに言いますが、天にいる、彼らの御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。

小さき者を受け入れる理由として、御使いが父なる神から遣わされているということです。ですから、主に対する恐れをもちながら、そういった人々を尊びなさいと言われてます。ここに、キリストの体の姿があります。あまり尊ばれていない体の部分が、体全体のために尊ばれるということです。

### 3B 迷った羊への情熱 11-14

そして 11 節が抜けていますね、引照部分にあります。「人の子は失われている物を救うために来たのです。」そして 12 節以降です、12 あなたがたはどう思いますか。もしある人に羊が百匹いて、そのうちの一匹が迷い出たら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。13 まことに、あなたがたに言います。もしその羊を見つけたなら、その人は、迷

わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜びます。14 このように、この小さい者たちの一人が滅びることは、天におられるあなたがたの父のみこころではありません。

小さい者たちの一人を躓かせていけない理由として、主がその人を救うために、九十九匹の羊を置いてさえも捜し出すという御心があるからだ、ということです。福音を伝えることのために、大きな犠牲を払っても構わないのだということですね。私は、海外から来た宣教師のことを見ると、本当にそのことを思います。何か海外転勤になったから来たとか、留学で来たとか、そういうのではないのです。福音を伝えたい、失われた魂を捜したいというその思い一つだけで来ているのです。自分の仕事をやめています。自分の住み慣れた国から離れています。自分の言語ではない言語で福音を伝えています。自国に留まっても、何も咎められることはありません。けれども、それでもやってくるのです。

けれども、韓国人の宣教師が今、日本に住んでいる外国の人たちにこう説教したのを聞きました。「あなたがたは、ビジネスで日本に来たかもしれない。けれども、それも神は用いられて、福音を伝えるために遣わされていたのです。」ということです。これは、私たち日本人にも当てはまりませんか？ 私たちは、海外から来る宣教師とは違いますが、けれども、天の御国のために自分の生活にあるものを取り除いていますか？ それ自体は悪いものではなく、良いものかもしれません。でも、イエス様は九十九匹を置いて、一匹の羊を捜そうとしている、そうした心を第一に持ってきていますか？ それとも、普通の生活をしていて、普通の生活が第一で、自分のために信仰を持っておけばよいと思っていますか？ この心を持たないということは、この小さき者を軽んじているということになるのです。

## **2A 兄弟の罪への取り組み 15-20**

そして 15 節からですが、イエス様が先ほど言われた「つまずきが起こるのは避けられない」と言われたことが、実際に教会で起こったらどうするのか？ということです。ここからは、とても重いテーマであると同時に、しっかりと取り組んで、教会の霊的回復や霊的復興のために直面すべき内容であります。

### **1B 教会戒規 15-17**

15 また、もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで指摘しなさい。その人があなたの言うことを聞き入れるなら、あなたは自分の兄弟を得たこととなります。16 もし聞き入れないなら、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。二人または三人の証人の証言によって、すべてのことが立証されるようにするためです。17 それでもなお、言うことを聞き入れないなら、教会に伝えなさい。教会の言うことさえも聞き入れないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。

ここは、「兄弟が罪を犯した時」の取り組みです。ですから、神を知らない人、世の中の人が罪を犯したということではなく、兄弟、つまり同じ信仰の共同体にいる者が罪を犯した時の話であります。このような時にどうすればよいのか？ということであります。三段階があります。第一は、二人だけの間で指摘する、責めることです。その時に悔い改めれば、何の問題もありません。赦さないといけません。けれども、聞き入れなかったらどうするか？第二は、もう一人、あるいは二人連れて来て問いかけます。ここで悔い改めれば、赦します。何の問題もありません。けれども、聞き入れなければ第三の段階です。教会全体でその人に伝えます。もしこの時点で、悔い改めなければ、教会そのものの交わりを断ち切ります。これを「教会戒規」とも呼びます。

第一であります、「二人だけのところで指摘しなさい」であります。「ガラ 6:1 兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」その兄弟を愛しているがゆえに、午前礼拝で話しましたが懇ろに戒めます。もし、このことを隠しているなら、それは兄弟を愛していることにはなりません。また指摘しないことによって、自分がその兄弟に恨みを抱くならば、それこそが罪です。戒めるということは、愛することです。そして大事なものは、二人だけのところで行うことです。多くの人が、これを守らずに他の人に話して、それで噂話となってしまう。また大事なものは、「あなたは自分の兄弟を得た」ということです。その人がいかに誤っているかを論破して打ち負かしても意味がありません。その兄弟を得るというのは、その過ちを正すことできるということでもあります。

こうやって、二人だけのことにします。第二に、「もし聞き入れないなら、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい」であります、このようにして他の人に助けを求めます。これは旧約の律法にあるものに基づいています。「申命 19:15 いかなる咎でも、いかなる罪でも、すべて人が犯した罪過は、一人の証人によって立証されてはならない。二人の証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。」もしかしたら、自分自身が訴えていることが間違っているのかもしれない。確かに箴言には、こう書いてあります。「箴 18:17 最初に訴える者は、相手が来て彼を調べるまでは、正しく見える。」私たちは、どうしても初めに訴えた人の印象が残って、実はそうではないことを知るまでに結構、意識を変えなければいけません。ですから、それが事実であると判明するまでは、先走った裁きをしてはいけません。そこで、律法では二人か、三人の証人によってそれが罪であると確認されると定められていて、イエス様もこのことを語っておられ、教会にも同じ原則が適用されています。

それでも聞き入れない場合は、教会に頼みます。その教会と言う時は、指導者である牧者や長老たちのことでしょう。教会として、問い質すのです。そして、聞き入れない場合は次、「異邦人が取税人のように扱いなさい」ということです。ユダヤ人の弟子たちが聞いていますから、その意味は分かります。つまり、「信仰の共同体の仲間ではない者として取り扱いなさい」ということです。こ

れを教会戒規と呼びます。例えば、教会の献金を着服したであるとか、結婚していないのに同棲生活をしているとか、中傷を言いふらしているとか、使徒パウロが、「正しくない者は神の国に入ることはできません」と言ったような内容が多くの場合当てはまります。

これが機能しておらず、使徒パウロ自身が霊的権威をもって処罰したのが、コリントにある教会でした。コリント第一 5 章によれば、父の妻を自分の妻にしている、つまり近親相姦を行っている者がいました。それを内部で裁かずにそのままにしていました。それこそが、その男に対して寛容を示しているとしたのです。裁いてはいけない、と。いいえ、イエス様がここで命じられているように、教会として彼を処罰しないとイケないのです。「5:12-13 外部の人たちをさばくことは、私がすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。外部の人たちは神がおさばきになります。「あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」」

ここで大事なのは、何のために取り除くのか？ということです。教会を清く保っているためというのは、次の 18-20 節を読むと分かります。もう一つは、本人が真実な意味で救われることです。パウロも、その近親相姦の罪を犯している者を取り除くのは、「彼の霊が主の日に救われるため(5:6)」と言っています。云わば、先ほどの手が躓かせるなら、取り除いてしまいなさい。体全体がゲヘナに投げ込まれないようにするためです、ということにつながります。その人が、自分自身のことであること何かを、追い出されてサタンの支配する世に置かれて気づくことによって、それで悔い改めて神の憐れみを受けることができるようにするためです。私たちには、二つの極端の誘惑があります。それは罪を犯しているのに、そのままにさせていることです。もう一つは、罪を犯したから教会から出したけれども、ただその人を罪に定めるだけで何ら回復のための道筋を示さない、ということです。そのどちらもが間違っています。教会の交わりから外すということは、その人の悔い改めと回復のためでもあります。

## 2B 教会の権威 18-20

18 章というのは、一つ一つがつながっている話になっています。18 節から 20 節のイエス様の教えは、15-17 節の教えを踏まえた上での話になっています。

18 まことに、あなたがたに言います。何でもあなたがたが地上でつなぐことは天でもつなぐられ、何でもあなたがたが地上で解くことは天でも解かれます。19 まことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。20 二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」

教会において、一人の人に戒規を与えるということには、教会自体が霊的に健全に機能している必要があります。つまり、一人の人を戒めるということは、実は自分自身を戒めることなのです。

親が子を躱ける時、それは自分自身が厳しく問われることになるのと同じです。この箇所には、第一に教会に対する神の権威、第二に祈り、第三にイエス様との交わりがしっかりと出来ているということです。

第一ですが、地上でつなぐのが天でもつなぐれ、地で解くことは天でも解かれているというのは、神ご自身の権威が教会の中で働いていることを意味しています。自分の好みでこの人は間違っているから教会を追い出さないといけないというものではあってはならないのです。自分たちも神を畏れかしこみ、その中で出します。また、パリサイ派のように兄弟たちの欠点を重箱の隅を突くように探るような、まるで宗教警察のような動きも間違っています。飽くまでも、神がおられる、教会における出来事は天につながっているのだという畏れかしこみがあってこそできることです。第二に、祈りです。私たちが二人、三人が祈る時に、中心人物はどの人間でもなく、真ん中におられるイエス様ご自身であることを意識することができます。ですから、この過程の中で祈りが多く積まれることとなります。そして追い出してもその後で、その過ちを犯している兄弟のために執り成して祈ることもできます。そして第三に、このことを通してイエス様が真ん中におられること知り、交わりがさらに深められるということです。

このような霊的な清め、霊的刷新の例としては、使徒の働き 5 章のアナニアとサツピラの事が挙げられるでしょう。当時、教会は全ての財産を持って来る流れになっていました。アナニアとサツピラは代金の一部を残して、これが全財産だと偽りました。問題は代金を残しておいたということではなく、偽ったということです。偽善の罪を犯していたのです。すると、アナニアはその場で倒れて息が絶えてしまいました。サツピラも同じ罪を犯したので息絶えてしまいました。そして 5 章 11 節にこう書いてあります。「そして、教会全体と、このことを聞いたすべての人たちに、大きな恐れが生じた。」さらに 12 節以降に、使徒たちによってさらなる奇蹟が行われ、皆が心を一つにして神殿の敷地において、また外部の人たちから尊敬され、また主を信じる者たちもますます増えて行ったとあります。

### **3A 赦しの命令 21-35**

このようにして、人を躱かせる者、悔い改めない者に対して厳しい処置をしなければいけないことを見ましたが、繰り返しますがそれは神の豊かな赦しという前提があります。どんなに大きな罪を犯していても、悔い改めればすべての罪が赦されるのです。ペテロのほうから、イエス様に兄弟が罪を犯しても、何回赦せばよいのですか？と赦しについての質問をします。

#### **1B 数えられない赦し 21-22**

21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。」22 イエスは言われた。「わたしは七回までとは言いません。七回を七十倍するまでです。」

午前礼拝を聞いてください、ペテロは、頑張っているのですが、それがかえって災いしています。七回まで赦すべきでしょうか、ということですが、当時ラビは三回までと言っていましたか、相当頑張っているのです。けれども、それは彼の誇り、自慢の裏返しでもあります。私たちが真面目に頑張る時に、イエス様は完全に打ち砕くようなことを言われます。なぜなら、天の御国は私たちの功德ではなく、神の恵みによって成り立っているからです。イエス様は、「七回を七十倍するまで」と言われました。

## 2B 赦さない愚かさ 23-35

### 1C 莫大な負債 23-27

23 ですから、天の御国は、王である一人の人にたとえることができます。その人は自分の家来たちと清算をしたいと思った。24 清算が始まると、まず一万タラントの負債のある者が、王のところに連れて来られた。25 彼は返済することができなかつたので、その主君は彼に、自分自身も妻子も、持っている物もすべて売って返済するように命じた。26 それで、家来はひれ伏して主君を拝し、『もう少し待ってください。そうすればすべてお返しします』と言った。27 家来の主君はかわいそうに思って彼を赦し、負債を免除してやった。

これは、当時の異邦人の王のことを取り上げているのだと思います。ここで、イエス様が一万タラントと言われた時に、弟子たちは少し笑ったかもしれません。何を言っているのですか？というぐらい天文学的な金額だからです。一タラントが六千日の労賃ですから、一万タラントは、6000 万日の労賃です。つまり、約 16 万 4 千年分の労賃です。ほとんど地球の起源から現代ぐらいまでの年代になります。ここで、この家来が、「もう少し待ってください。そうすればすべてお返しします」と言っていることがものすごく滑稽になります。どれだけ負債を負っているか分からないのです。けれども、もっとも滑稽、いや狂気の沙汰なのは、それを全て帳消しにした王の判断です。

はい、これが私たちが神の前で犯している罪の量であり、どれだけの罪をお赦しになったのかを示す、神の無尽蔵の恵みであります。神が、全ての不義から私たちを清めてくださったという時に、どれだけの罪が赦され、清められたかを覚える必要があります。永遠かかって、神に対してその恵みをほめたたえ、感謝すればいいか分からないのです。

### 2C 神の赦しに基づく赦し 28-35

28 ところが、その家来が出て行くと、自分に百デナリの借りがある仲間の一人に出会った。彼はその人を捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。29 彼の仲間はひれ伏して、『もう少し待ってください。そうすればお返しします』と嘆願した。30 しかし彼は承知せず、その人を引いて行って、負債を返すまで牢に放り込んだ。31 彼の仲間たちは事の成り行きを見て非常に心を痛め、行って一部始終を主君に話した。

これは、あまりにも痛々しい話です。この愚かしさに愕然とし、衝撃を周りの仲間は抱いています。なぜなら、百デナリの借金と言え、百日分の労賃です。彼にとっては結構な額ですが、自分自身が6000万日分の負債を王に対して持っていたのです。

32 そこで主君は彼を呼びつけて言った。『悪い家来だ。おまえが私に懇願したから、私はおまえの負債をすべて免除してやったのだ。33 私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか。』

彼の問題は、赦すことができなかったという能力の問題ではありません。あまりにも、自分の罪の大きさを知らず、それを上回る神の恵みの大きさを知らなかったのです。神について、全てが浅く付き合っただけです。キリストの十字架にある、神の血を流す犠牲、罪の重さと、それを上回る、独り子をさえお与えになる神の狂ったような愛、そうではなく、何となく神の愛があって、軽くしか接していないのです。それで、他の兄弟への赦しも完全にすることができないのです。全て、神のレベルではなく、人間のレベルで終わらせてしまっています。

34 こうして、主君は怒って、負債をすべて返すまで彼を獄吏たちに引き渡した。35 あなたがたもそれぞれ自分の兄弟を心から赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに、このようになさるのです。」

赦すということが、してもよくて、しなくてもよい物ではないことがここから分かります。キリスト者には、神の赦しの中に生きていくため、自分の心にも赦しの霊に満たされていなければならないということであり、キリスト者の中に数多くの証しがありますね。例えば、かつて黒人の教会に白人優越主義者が銃を乱射し、多数が殺されました。彼が裁判にかけられた時に、その遺族の人たちが彼に声をかけて行く場面がありましたが、泣きながら、「私はあなたを赦します。悔い改めて、イエス・キリストの福音を受け入れてください。」と嘆願していました。そうです、主が命じられていることですから、それを行うのみです。

そしてそれを行えないということは、自らが神の赦しから離れてしまうこととなります。赦さないということは、それだけで済むものではありません。自分自身が神から赦されたという確信もなくなり、がんじがらめの牢屋の中に入れられたような状況となります。神は人知をはるかに超えた愛を持ち、恵みにあふれています。ゆえに、天の御国の市民とされた私たちも、赦しにおいて一般の人々から見たら気違いではないか？と思われるほどでしょう。

そしてもう一度申し上げますが、悔い改めてもないのにその罪を赦しなさいということではないのです。そのことで苦しむクリスチャンが多いです。その時には、先ほどの罪を指摘するという過程を教会の助けを借りて行っていくということです。神の正義と愛は矛盾しません。